

とちぎ 米麦改良

令和7年1月
第134号

(公社)栃木県米麦改良協会
宇都宮市平出工業団地9番地25
☎(028)616-8700



新年のごあいさつ

栃木県米麦改良協会 会長 国府田 厚志

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、希望に満ちた新年をお迎えのことと、心よりお慶びを申し上げます。

昨年は、25年ぶりに「食料・農業・農村基本法」が改正され、現在、これに基づき、基本計画の策定や諸制度の見直しが行われております。

生産現場においては、生産資材価格の高止まりに加え、記録的な暑い夏でイネカメムシやこれまでにない麦病害等も発生しました。また、一時期、米が量販店で品薄状態となり小売価格が高騰するなどの混乱も生じました。

激動する国際情勢、常態化する異常気象、国の制度変更等、目まぐるしく変化する農業情勢ですが、我々農業団体は、農家の方々が安心して経営を継続していけるよう最大限の努力をして参ります。

種子生産につきましては、稲種子は、計画通りの数量が確保できる見込ですが、麦、大豆は、天候不順の影響を受け、一部契約数量が確保できない品種もあり、備蓄で対応しました。

天候不順や需要変動等により、優良種子を安定して生産、供給することが年々難しくなっております。

協会としては、県や種子場（たねば）農協との連携を一層密にし、これまでの経験や既存の方法に^{とら}囚われることなく、柔軟な発想と現場主義、ユーザー視点をモットーに、優良種子の安定生産、供給に努めて参ります。

今年一年が皆様方にとりまして、幸多い年となることを心からご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



令和6年産水稻作の概要と 令和7年産水稻の生産技術対策について

栃木県農政部経営技術課

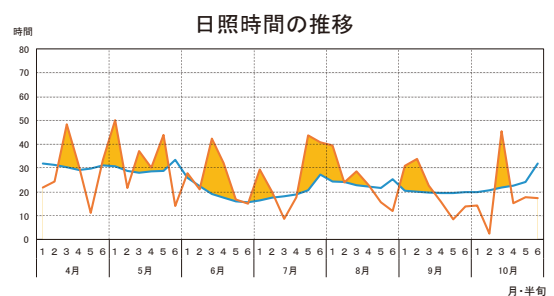
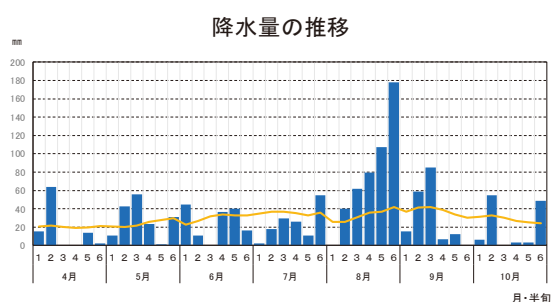
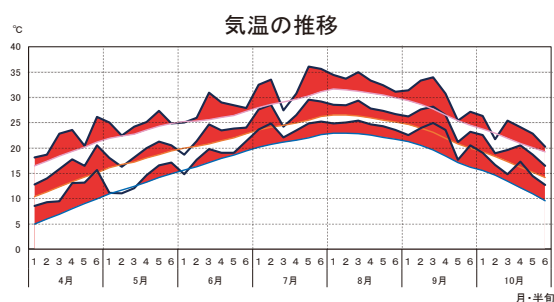
1. 令和6(2024)年稲作の概要

(1) 気象及び水稻の生育経過

○気象傾向

令和6(2024)年の気象の傾向は、記録的な高温だった令和6(2023)年と同様に春から秋にかけて気温の高い状態が続き、低温は一時的だったため、年平均気温は全国的に高くなりました。

このため、全国的に米の品質が2年連続で低下し令和6(2024)年産水稻の1等米比率は76.1%(5年産61.2%)と低下しました(11月末現在)。栃木県においても1等米比率が86.3%(5年産84.1%)と全国に比べ高い水準ではあるものの、全国同様2年連続で品質が低下した年となりました。



令和6(2024)年 気象経過(宇都宮AMeDAS)

○水稻生育

〈育苗期・移植期〉

育苗期間中の高温障害による発芽不良が一部で確認されましたが、全体的には良好な生育でした。

移植後は気温が高く経過したことにより、活着は良好でした。除草剤の薬害が一部で発生しましたが、早期に回復しました。5月24日の調査では草丈・茎数は前年並み、葉色はやや淡い傾向でした。

農業総合研究センターの分けつ発生率は第2節分けつ発生はやや少なく、第3節分けつが多くなりました。

〈生育中期〉

気温はやや高めに経過しましたが、昨年ほどの高温にはならなかったため、前年ほど生育は進みませんでした。

6月7日調査では草丈は前年よりも短く、茎数も前年よりやや少なくなりました。葉色については各地でバラツキが大きくなりましたが、全体的には前年並みとなりました。

葉いもち病の発生について6月初めにBLASTAMによる感染好適条件となった日がありましたが、広がりは確認されませんでした。

〈最高分けつ期〉

6月中旬以降気温が高く、日照時間が長く経過したため、生育は前年と同程度まで進みました。

6月21日調査では草丈はやや短く、茎数は前年よりやや多くなり、葉色がやや濃くなりました。

7月5日調査では草丈は前年並み、茎数は前年並みからやや少なくなりました。梅雨期間中の降水が少なく、水不足が懸念されましたが、令和5年のような極端な水不足は観測されませんでした。

早植えコシヒカリの出穂期の平均は7月23日で観測史上最速だった前年と同時期となり極めて早い出穂期となりました。

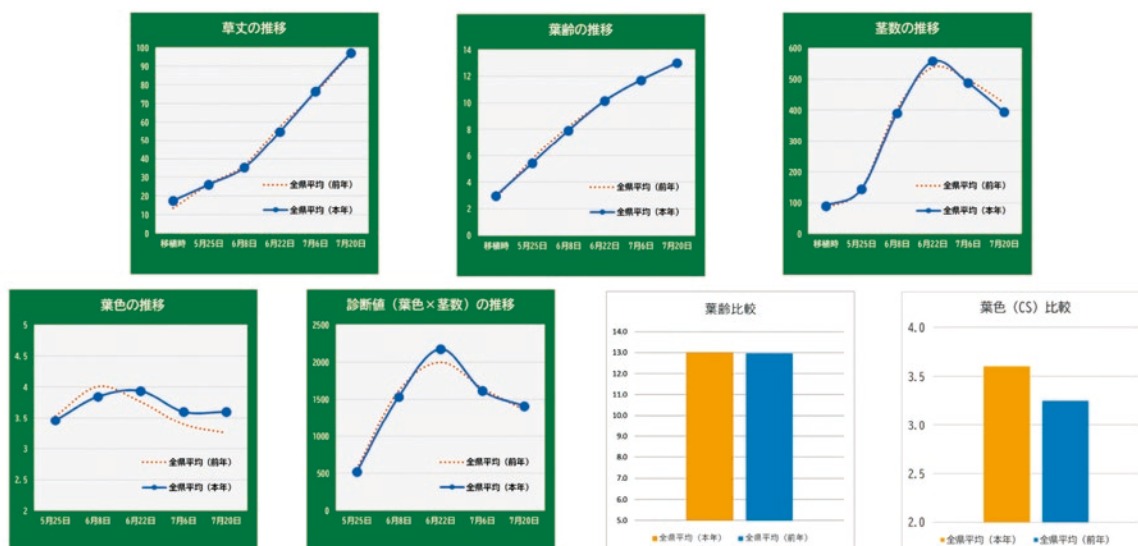


図 コシヒカリ生育データ(7月20日調査)

○収量・品質

本県の令和6年産水稻の作況指数は101の「平年並み」となりました。分けつ期に当たる6月上旬以降おおむね天候に恵まれ、穂数及び1穂あたりもみ数共に平年並みで、全もみ数はやや多く、また登熟は出穂期以降、おおむね天候に恵まれたことにより「平年並み」となりました。

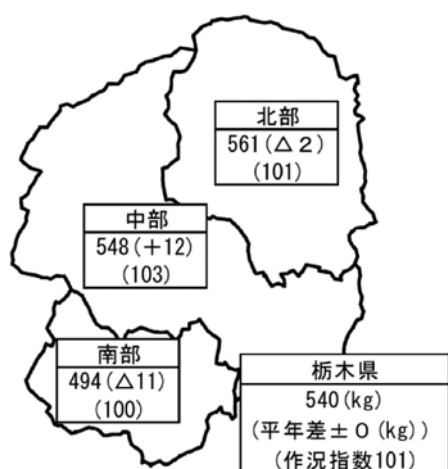


図 水稻の作柄表示地帯別10a当たり収量及び作況指数(関東農政局12月10日公表)

年産	品種	比率 (%)			
		1等	2等	3等	規格外
R6	うるち米全体	86.3	10.8	2.5	0.4
	コシヒカリ	90.4	8.9	0.6	0.1
	とちぎの星	88.1	10.6	1.2	0.2
R5	うるち米全体	84.1	14.6	0.9	0.4
	コシヒカリ	85.5	13.6	0.8	0.1
	とちぎの星	93.2	6.2	0.3	0.2

表 農産物検査結果(速報) 11月末日現在

11月末時点のうるち米の1等米比率は86.3%と、夏期の高温の影響により令和5年同様低下しました。2等以下の格付け理由の主なものは、

白未熟粒、カメムシによる着色米が特に多くなりました。特に、県南部においてイネカメムシの発生により基部斑点米が多く確認されました。



写真 イネカメムシ(左：成虫 右：幼虫)



写真 イネカメムシによる基部斑点米

2. 令和7(2025)年産水稻生産技術対策

夏季の高温が常態化し、気候変動が大きい中で安定した稲作を継続するためには、全天候型の稲作技術を展開する必要があります。そのためにも、次の事項に留意しながら水稻の栽培を行いきましょう。

(1) 高温時の水管理

特に出穂期～出穂後20日間の平均気温が26℃

より高くなると、白未熟粒の発生が高くなります。また、この時期に用水が不足すると被害が拡大しますので、適正な水管理を行うことが必要です。また、落水も出穂後30日以降として品質確保に努めてください。

(2) 斑点米カメムシ類の防除

令和6年の夏が高温で経過したこと、斑点米カメムシ類の虫数が増加したことに加え、暖冬傾向により越冬虫の数が多いことが予想されます。出穂前の畦畔管理(草刈り)や適正な薬剤により、カメムシ類の防除を行いましょう。

また、令和6年は県南部において「イネカメムシ」が多く発生し、水稻に甚大な被害が発生しました。このカメムシが出穂期に加害すると稲に不稔が発生し、収量が低下します。また、登熟期に加害すると、基部斑点米が発生し品質低下しますので、最低でも出穂期及び1週間後の2回防除が必要となります。また、それでも虫がいる場合はさらに1週間後の追加防除を行いましょう。図に示した防除体系を参考に徹底した防除をお願いします。令和6年に発生・被害が無かった地域では、発生予察情報により防除を行ってください。従来の方法より防除回数や時期が異なりますので、それぞれの地域でRCヘリでの空散やドローンによる防除など適

切な方法について検討しましょう。

(3) 土づくり

水稻の収量・品質の向上を図るため、深耕の実施や、たい肥・土づくり肥料を積極的に施用するとともに、土壌診断に基づく適正な施肥を行いましょう。特に県内の水田においてケイ酸不足が顕著になっています。ケイ酸分が不足すると高温時の登熟が悪くなりますので不足する水田ではケイ酸カリなどの施用をお勧めします。

(4) 「とちぎの星」の作付推進

高温登熟性が高く、品質が安定している「とちぎの星」の作付を検討してください。令和6年度のような猛暑の夏でも、品質を確保することができました。さらに、縞葉枯病の発生地帯でも耐病性を有しているため、安心して栽培できます。

(5) 適期刈取りの実施

出穂後10日間の最高気温が高く経過すると、玄米の構造が脆弱となり、胴割米が発生しやすくなります。特に刈取り適期(帯緑色率10%～5%)を過ぎると、極端に胴割米の発生率が高くなります。ほ場をよく確認して、刈遅れが無いように収穫作業を進めてください。

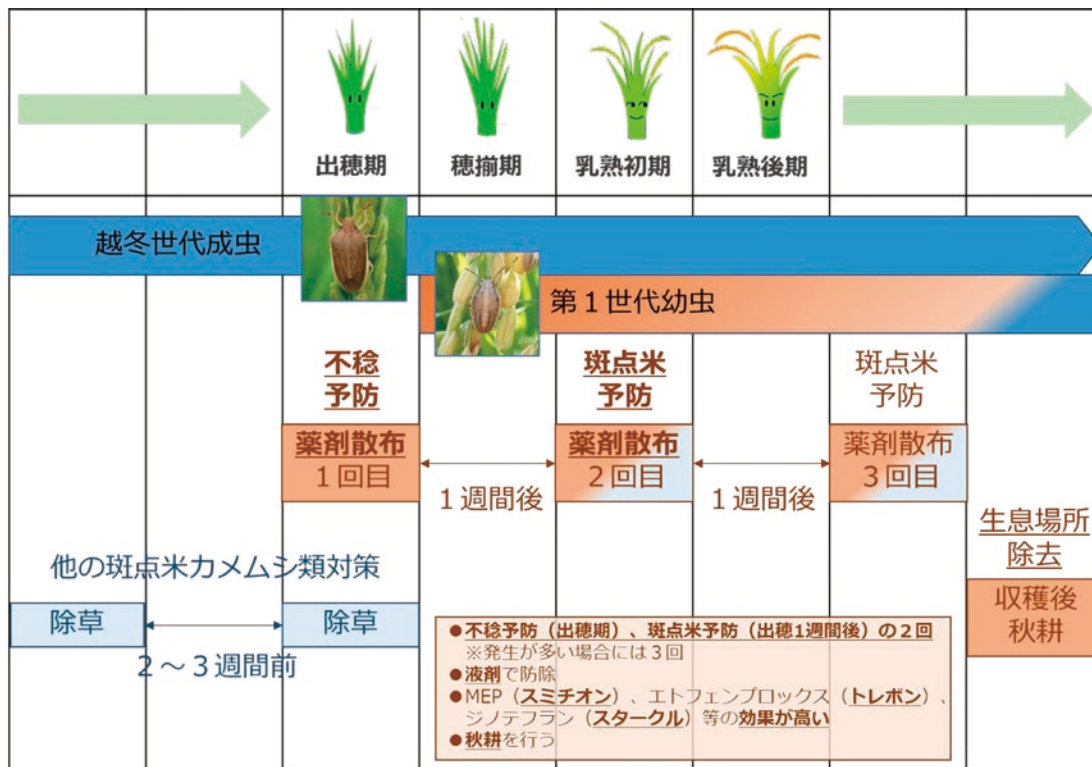


図 イネカメムシの防除体系

令和7年産稲種子の生産・需要動向（備蓄増減）

単位：t，%

品種		確保					需要 見込 (10月※) (t)	備蓄 見込 (t)	需要に占める 備蓄の割合(%)	
		令和6年産稲種子生産			前年 備蓄	計 (t)				
		契約 数量	生産 見込	対比						
		A	B	B/A	C	① = B+C			②	③ = ① - ②
主 食 用	コシヒカリ	832	826	99	307	1,133	844	289	34.2	36.4
	あさひの夢	205	205	100	52	258	174	84	48.1	30.0
	なすひかり	41	41	100	28	69	47	22	46.2	59.4
	とちぎの星	435	435	100	154	589	379	210	55.4	40.6
	夢ささら	1	1	100	1	2	1	1	50.6	64.9
	きぬはなもち	14	14	100	2	16	15	2	12.8	13.5
飼 料 用 多 収	夢あおば	—	—	—	296	296	49 (県内44県外5)	247	505.0	637.8
	月の光	77	77	100	103	180	80	100	118.1	129.3

※ JA 全農とちぎが10月上旬で取りまとめた7年産用稲種子予約に本会が推定した当用申込、県外需要を加算

主食用品種、飼料用多収品種ともに十分な量の備蓄が確保できています

令和7年産稲種子生産計画

令和6年12月10日に開催された「令和7年産稲種子生産ほ場設置計画会議」において、下表のとおり生産計画が承認されました。（すべて前年計画と同数）

ア、品種別

品種名	令和7年産稲種子生産計画（案）			面積 R7 / R6 （％）
	面積（ha）	反収 （kg/10a）	数量（t）	
コシヒカリ	208	400	832	100
あさひの夢	47	440	205	100
なすひかり	11	400	45	110
とちぎの星	99	440	435	100
夢あおば （飼料用米多収品種）	0	－	0	－
月の光 （飼料用米多収品種）	18	440	77	100
夢ささら	1	400	1	100
きぬはなもち	4	360	14	100

イ、種子場別

種類	JA 名	品種名	種子生産ほ場面積			反収 (kg/10a)	令和7年産 稲種子生産 計画 (t)	摘要
			令和7年産		令和6年産			
			面積 (ha)	前年 対比 (%)	面積 (ha)			
水	なすの（黒羽）	コシヒカリ	147	100	147	400	590	
	なすの（塩那）	月の光 (飼料用米多収品種)	18	100	18	440	77	
	なすの（大田原）	夢ささら	1	100	1	400	1	
		計	165	100	165		668	
稲	なす南	コシヒカリ	61	100	61	400	242	
	しもつけ	あさひの夢	47	100	47	440	205	
		とちぎの星	67	100	67	440	295	
		きぬはなもち	4	100	4	360	14	
		夢あおば	0	0	0	—	0	
		計	118	100	118		515	
	はが野	とちぎの星	32	100	32	440	140	
	しおのや	なすひかり	11	110	10	400	45	
合 計			387	100	386		1,610	

(有機栽培種子)

単位：ha, t, %

種類	品種名	令和7年産種子生産計画			令和6年産種子生産計画			摘要
		面積 (ha)	反収 (kg/10a)	数量 (t)	面積 (ha)	反収 (kg/10a)	数量 (t)	
水稻	コシヒカリ	1	130	2	1	130	2	民間稲作 研究所

令和7年産米の生産・集荷・販売に向けて

全農栃木県本部 米麦部

1. はじめに

日頃より本会米麦事業につきましては、多大なるご理解・ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、令和6年産主食用米は、国が基本指針において、令和6年産主食用米生産量を令和5年産同水準の669万トンと示しました。国の指針を受け本県においては、再び在庫が増加し価格が下落しないようにするため、引き続き需要に応じた生産が必要として、令和5年12月25日の第2回県農業再生協議会通常総会において、令和6年産主食用米の作付け参考値については、令和5年産作付け参考値と同水準の44,652haを据え置くこととし、市町農業再生協議会宛てに提示しました。

JAグループは、栃木県産米の需給環境を改善するため、着実な作付転換と販売力の強化を進める必要があり、JA出荷者全員への取組目標の設定、重点推進組合員の選定と役職員による個別推進等を実践し、主食用米の作付参考値以内の作付となるよう推進してきました。

令和6年産を取り巻く需給環境は、令和5年産における全国的な品質不良や、インバウンド需要の増等により均衡局面にあります。また、令和7年6月末の民間在庫量については、158万トンと前年を5万トン上回る見通しとなっていますが、需給が均衡するといわれる180万トンを大きく下回っており、引き続き需給は均衡した状況が継続すると推測されます。

令和8年6月末の民間在庫量を適正に維持するため、令和7年産主食用米は、引き続き「需要に応じた生産」を継続する必要があります。

全農栃木県本部では、全体需給、作柄動向、市中相場、他産地銘柄の価格動向および実需者の販売動向を勘案しつつ、近年の資材価格の高騰をふまえた再生産価格を念頭に置いた適正な販売価格の実現による生産者手取りの最大化を確保する視点を持って取り進めてまいります。

2. 令和6年産の作柄概況

全国における主食用米の作付け面積は125万9千ha(前年比+1万7千ha)となりました。一部の地域で5月下旬から6月上旬にかけての低温や6月下旬から7月中旬にかけての断続的な日照不足、8月以降の記録的な高温等の影響により収量が低下しましたが、全国的にはおおむね天候に恵まれたため、全国の作況指数は「101」の「平年並み」、主食用米の収穫量は679万2千トン(前年比+18万2千トン)となりました。

本県における主食用米の作付面積は、49,000ha(前年比+1,800ha)となりました。

おおむね天候に恵まれたことにより作況指数「101」の「平年並み」となり、主食用米の収穫量は、26万4千トン(前年比+1万6千トン)となっています。

3. 令和6年産米の集荷・販売状況

「令和6年産生産・集荷・販売方針」及びその具体策に沿って、JA・全農が一体となりJAグループ栃木への集荷結集に取り組みましたが、令和5年産における全国的な品質不良や、インバウンド需要の増、台風・地震に備えた買いだめ需要の増、さらにはメディアによる過剰な報道等の影響を受け、端境期におけるコメの不足感が蔓延したことにより、県内外の集荷業者による集荷競争が激化し、全農への主食用米の販売委託数量は5万7千トンと計画・前年を大きく下回り厳しい集荷状況となっています。

販売面では、既に締結している事前契約に対し集荷数量が不足する事態となっております。しかし、次年産以降の集荷確保の観点からも、一円でも高い精算金を生産者にお返ししていくための販売価格実現に向け、各販売先と協議を行うとともに、早期販売・早期出庫の推進を実施しています。

また、とちぎ米のさらなるブランド化を推し進め、環境変化に左右されない実需者への販売により業務用米と家庭用精米とのバランスの良



い販売を進めています。特に、2024物流問題をふまえ、大消費地に近く安定した物流・納品が可能な栃木の地の利を活かすため、首都圏を中心とした業務用実需者の確保や家庭用精米での新規採用による販売拡大に向けて推進を継続します。

消費宣伝・販売促進活動では、Web媒体を活用した広告宣伝と、その広告宣伝に連動したキャンペーン等を展開することにより、インターネット販売サイト(JAタウン・Amazon等)での販売拡大に取り組みます。

また、栃木米アンバサダーU字工事を活用し、県内に加え首都圏を中心とした販売に向けて認知度向上対策を強化して取り組みます。

4. 7年産をめぐる情勢

7年産米の作付けは、需給均衡を維持するため、引き続き「需要に応じた米づくり」に取り組む必要があります。

国指針では、令和7/8年産主食用米等の需要量は、令和6/7年産主食用米等の需要量674万トンから▲11万トンの663万トンと見込まれています。また、令和7年産主食用米等の生産量については、683万トンと令和6年産生産量と同水準で設定されました。これらを踏ま

え、県農業再生協議会と連携し県及び市町別の作付参考値(面積)を設定・提示していく予定です。

5. 令和7年産生産・集荷・販売の取組み

令和7年産米生産・集荷・販売については、令和6年12月に策定した「令和7年産米にかかる基本方針」や、「令和7年産生産・集荷・販売方針」に沿って取り組みます。

令和7年産についても、「需要に応じた生産」を進め、JAグループ栃木として販売先への年間を通じた安定供給責任を果たしていく必要があるため、令和7年産においては、主食用米の確実な集荷確保に向けて、JA未利用・低利用生産者や集落営農法人からの集荷拡大によるJAグループ栃木のシェアアップによる安定供給に取り組みます。

また、世界的な環境負荷低減に向けた動きや、栃木県が進める“とちぎグリーン農業推進方針”への対応として、水稻栽培において効果があるとされる中干し期間の延長についてメリット・デメリットを検証するため、令和7年度も継続して調査圃を設定して取り組みます。

引き続き、皆様方のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

—大豆生産情勢—

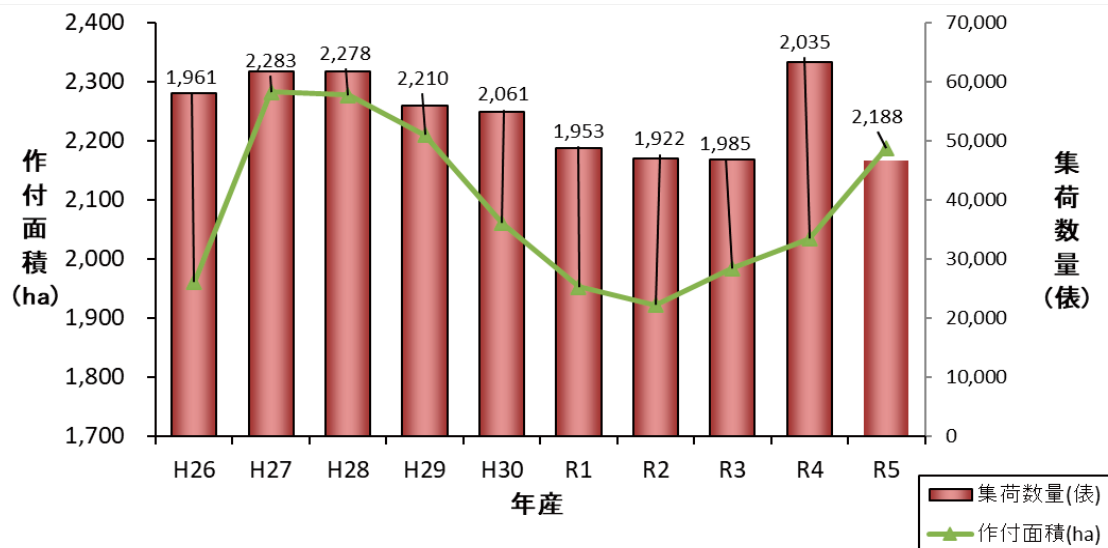
JA全農とちぎ 米麦部

1. 令和5年産大豆の作付け動向について

令和5年産の国会全国大豆集荷数量は約190千トン(前年比108%)となった。品位については、高温干ばつ・収穫期の降雨の影響等により全国的に例年と比べ大粒・上位等級比率が低い傾向となった。

栃木県では作付面積2,135ha(前年比97.6%)、集荷実績2,798トン(前年比74%)となった。7月の初期成育は平年並の生育となったが開花期以降に高温が続き、乾燥した圃場が見受けられた。また、カメムシ類の発生が見られ、吸汁による不稔や落莢が発生した。その結果、作付面積、集荷数量ともに前年を下回る実績となった。6年産以降の全国的な作付面積維持と生産回復を見据え、長期的に栃木県の需要を確保するため、引き続き豆腐加工品や納豆などの分野を中心に契約栽培取引等の拡大に努めていく。

■栃木県産大豆の面積及び集荷数量の推移(JA全農とちぎ集計)



2. 全国の主要品種動向(上位10品種)

〈主要品種の生産計画〉

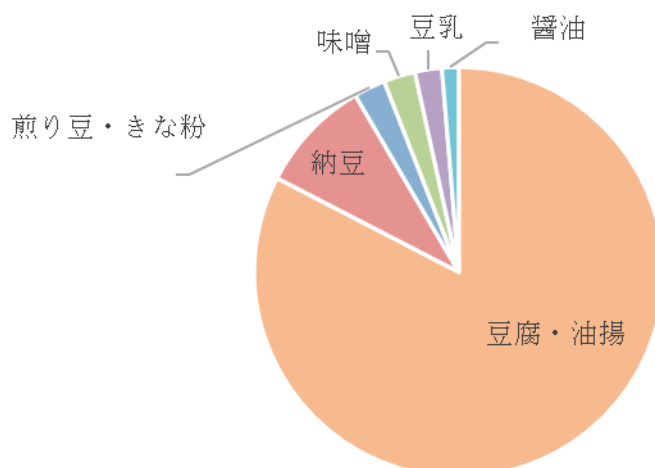
品種名	作付面積 (ha)			集荷見込 (トン)		
	4年産	5年産	5年産/ 4年産	4年産	5年産	5年産/ 4年産
とよまさり	29,589	32,245	109%	57,519	57,991	101%
フクユタカ	31,754	28,703	90%	36,388	41,363	114%
里のほほえみ	11,750	12,676	108%	16,973	16,152	95%
リュウホウ	11,309	11,985	106%	12,560	7,987	64%
ユキシズカ	5,461	5,543	102%	9,920	10,818	109%
エンレイ	5,328	5,581	105%	7,357	7,223	98%
ミヤギシロメ	5,470	5,628	103%	7,261	8,255	114%
ちくしB5号	634	4,005	632%	481	7,826	1627%
タチナガハ	2,868	3,041	106%	3,841	4,908	128%
おおすず	4,226	4,216	100%	3,421	7,805	228%

※北海道の面積値は全産の作付面積(ホクレン集計)。

栃木県産大豆の販売拡大に向けて

- 現在、県内では約 2,800 トンの集荷があり、その内約 1,680 トンが契約販売となっています。近年、栃木県産大豆を求める実需は増加しております。
- 今後の国産大豆の販売拡大に向けて、輸入大豆から国産大豆への切替推進や、新たな国産大豆需要の開拓によるシェア拡大を進めています。
- 大豆の健康機能に注目が集まり、新しい大豆製品の開発が盛んです。中でも豆乳・大豆ミート関連商品は市場規模が拡大しており、今後も同様の展開が続くと見込まれます。
- 栃木県産大豆については、大手豆腐メーカーや豆乳メーカーを中心に交渉し、契約栽培取引の推進による安定した需要の確保に努めています。

■栃木県産大豆に占める各用途の割合



■新たな大豆加工食品の商品

- プラントベースフードなど新たな加工食品分野における国産商品の定着を目指します。

○大豆を使用したドーナツ



○大豆ミートを使用した冷凍食品



(公社) 米 麦 改 良 協 会 情 報

○優良種子生産法人に学ぶ ～種子生産経営研修会を開催～

11月18日、栃木県JAビルにて「種子生産経営研修会」を開催しました。今後、種子産地の軸となる生産法人や集落営農について、県外の実践事例を学ぶべく種子生産者や関係者27名が参加しました。

◆県内種子生産法人の現状報告

県内の種子生産法人経営の現状について、協会の渡辺担当からアンケートの集計結果を報告しました。



現状報告

◆優良事例講演：法人経営における種子生産のノウハウ

宮城県の農事組合法人いかずち代表・佐藤和也氏による講演が行われました。佐藤氏は、スマート農業技術を活用した種子生産の実証事例を紹介。ICT経営管理ツールなどを活用することで作業効率化やデータ管理の向上を実現した事例は、多くの参加者の関心を集めました。

講演では以下の技術の利点と課題について具体的な説明がありました。



講師：農事組合法人いかずち
代表 佐藤 和也 氏

・異株除去技術（田植機・除草機）

高精度な直進作業の課題が指摘されつつも、省力化への期待が大きい。

・病虫害防除（ドローン）

作業時間短縮に有効だが、バッテリー仕様の統一化が課題。

・遠隔水管理装置

一部のほ場で有効活用が見られたものの、側溝詰まりが課題。

・ICT 経営管理システム

データ活用によるほ場管理の見える化が作業効率の向上に繋がった。

特に、ICT経営管理システムの導入により、佐藤氏の法人では夜間の打ち合わせ作業が大幅に減少し、働き方改革にもつながったとのことです。

◆交流会で意見交換

研修後は栃木県JAビル内レストランで交流会が開かれ、参加者間で意見交換が行われました。オードブルや煮物を囲みながら、講師の佐藤氏とも直接話せる場となり、参加者にとって実り多い時間となりました。



交流会での意見交換

◆今後の展望

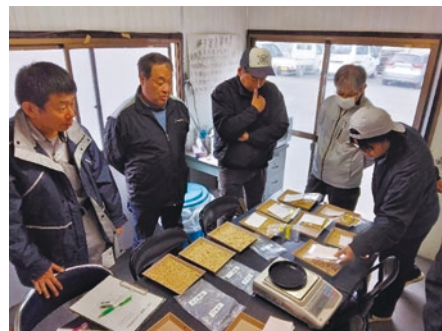
今回の研修会では、優良事例の共有を通じて、本県の種子生産が直面する課題解決へのヒントが得られました。スマート農業を活用した経営効率化の可能性を探る動きが、今後の種子産地の維持に向けた一歩となることが期待されます。

○令和6年産大豆種子の下見指導会

令和6年産大豆種子について、11月下旬に調製程度確認会を開催し、本年の水分・皆掛重量及び品質等について確認を行いました。県経営技術課の青木革専からは、11月下旬になっても気温が下がらず、青立ち株、葉鞘が残っている。収穫が遅れることで、害虫粒・しわ粒・裂皮粒等が懸念されるところの報告がありました。

12月には、各種子場JAにおいて下見指導会が実施され、農産物検査員等の指導の下、各種苗生産者が調製を行っている製品について、入念な確認が行われました。

本年は、契約数量を確保するため、準種子の規格を活用してより多くの種子の確保に努めています。



○令和6年度第3回理事会を開催

令和6年11月29日（金）に第3回理事会が栃木県JAビル大研修室Aで開催されました。

協議事項の第1号議案「令和6年度残量処理計画（案）について」及び第2号議案「（公社）栃木県米麦改良協会会計規程（案）の制定について」は、協議の結果、原案のとおり可決承認されました。

報告事項として、下記の5件の報告が承認されました。

- （1）令和6年度事業の実施状況
- （2）令和7年産麦類種子の生産
- （3）事故処理負担金
- （4）令和7年産用稲種子の申し込み状況
- （5）今後の飼料用米多収品種



○種子生産研修会（宿泊）を開催します！

昨年度に続き本年度についても、宿泊研修会を開催します。

気温の上昇に伴い農業を取り巻く環境は大きく変化しています。種子生産者の経営にも大きな影響を及ぼしていることを踏まえ、今回は、イネカメムシの生態・被害及び防除法について、中日本農業研究センターの石島上級研究員を講師に迎えて講演を開催する予定です。また、昨年同様に稲、麦、大豆の分科会に分かれ、それぞれの課題を掘り下げる研修会とすべく準備を進めています。

この研修会で各種子場での課題の共有や懇親が深められればと考えています。

種子生産者の皆様の積極的な参加をお待ちしています。



- ・日 時：令和7年2月13日（木）～14日（金）
- ・場 所：鬼怒川グランドホテル夢の季（鬼怒川温泉大原1021）
- ・研修内容
 - （1）共同研修（優良産地表彰、情勢報告他）
 - （2）全体集会（講演：水田等におけるイネカメムシの生態、被害及び防除法について）
 - （3）分科会（稲、麦、大豆）
- ・参加費（宿泊費）：10,000円

Next Seed Producer ● ● ●

採種農家の高齢化が進む中、次の世代の種子生産を担う経営体の参考となりそうな事例を御紹介していきます

JAしもつけ 採種部会岩舟支部

(株)TanakaFarm 誠

代 表 田 中 誠 氏



法人化までの経過について教えてください。

平成22年に就農し、翌年に事業を継承しました。当初は農地が分散しており、作業効率が課題でしたが、平成25年には地域の離農者増加に伴い農地の集約が進みました。この間、種子ほ場の管理状況を見ていた地域の方々からの信頼が高まり、水田管理を任されるようになりました。平成30年には法人化を実現し、現在に至ります。

現在の経営概況を教えてください。

令和6年産では、米は種子生産16.4ha、主食用稲42.3ha、麦は種子生産2.9ha、一般作43ha、大豆は一般作13.6haの作付です。就農当時と比べ作付面積は米は約4倍、麦は約3倍に増加しました。所有する農機具は、50馬力以上のトラクター7台、8条植え田植機1台、コンバイン4台、ドローン1台など、最新の機器を導入することで効率的な運営を実現しています。また、GPSアンテナを導入したことでトラクターやコンバインの操舵アシストの精度が向上し、労力負担が軽減されました。

令和6年度役職員は役員4名、正職員3名（内試用期間2名）、嘱託・パート4名の計9名で構成されています。特定の業務担当を固定せず、季節ごとに変わる作業に対応できるよう柔軟に役割を分担しています。例えば、種子生産特有の管理である雑穂抜きは全員で対応する体制を取り、少人数ながらも効率的な運営を可能にしています。このようなフレキシブルな体制が季節変動の激しい農業経営を支えています。

今後の展望について

5年後には経営規模をさらに拡大させたいと考えています。しかし、人材の確保が大きな課題です。特に、除草や雑穂抜きなどの手作業には多くの時間と労力が必要であり、効率化と人材育成が欠かせません。また、10年後には50代を迎える自身の立場から、次世代への事業継承を見据えた人材育成にも注力していきます。